

# ナメクジと蛇と蛙

——今、この平和問題を考えるための一つの試み——

森 島 吉 美

(受付 2006年10月6日)

## 「なぜ？」の持つ猥褻さ

ひとはいう。「なぜ？」がひとを人間にしてきた、と。「なぜ？」がその人間の進化を可能にしてきた、「なぜ？」が科学の基礎を作ってきた、「なぜ？」が理解の源泉である、と。

しかし、『ショアー（ユダヤ人絶滅）』<sup>1)</sup>の監督ランズマンは、その「なぜ？」を文字通り「<なぜ・わけ>もなく」拒否する。人間が、進化をし、科学を発達させ、その挙句に「理解」不能の大罪を犯した。収容所に送られたユダヤ人に突きつけられた第一の掟は、「ここには<なぜ>がない」<sup>2)</sup>であった。だから、その真相を「理解」するなんて、ランズマンにはとても受け入れられる事柄ではなかった。

『「なぜユダヤ人は殺されたのか」と、このように問うことによって、この問いにはらんでいる猥褻さが一挙に露呈することになる。理解するという計画には、まさしく絶対に猥褻なところがあるものだ。理解しないということこそ、わたしが『ショアー』を練り上げそれを実現する年月（11年）の間ずっと守ってきた情け容赦ない掟であった。……（この高度な防御の構え、馬に遮眼帯をつけて余計なものを見させないようにこうして目を一点に集中し）他のものに頑なまでに目をつむっているというのは、ここでは

---

1) Claude Lanzmann: “Shoah” 1985, Lanzmann 監督, フランス映画

2) Primo Levi (1919~1987): 「アウシュビッツは終わらない」, 竹山訳, 朝日新聞社, このアウシュビッツでの規則は、彼が同収容所に着くなり、一人の親衛隊兵士から教えられたと語っている。

眼差しのもっとも純粹な様態として、文字どおり人の目を見えなくさせるようなある現実(ユダヤ人撲滅)から眼差しを他の方向に逸らせないための唯一の仕方(だった)<sup>3)</sup>。

この「猥褻さ」は、例えば、セクハラ事件の際、「その被害者はなぜ、いかなるセクハラを受けたのか」という問いを考えたときもっとはつきりわかる。セクハラ被害者から、ねほりはほり、被害の状況を聞きだそうとする聞き取りの場面を想像してみればよくわかる。この聞き手には、目の前の具体的被害者が見えてこない。それどころか、この聞き手によって、セクハラ被害者に、加害者が突きつけられ(そもそもセクハラがあったのか?)、組織のプレッシャーが加えられ(職場の同僚を訴える行為!)、結果、あってもないことが強要される(事件が組織外に公になりはしないか?)。言い換えれば、セクハラ被害者の周りには、加害者がいる、組織がある、社会(世間)がある。セクハラ被害者は彼らのさらし者になっても、具体的セクハラ被害を見つめるものは皆無である。

「理解する」ことが、目の前の具体的現実から眼を逸らすことになるとはどういうことだろう。それはさながら、オデュッセウスが、自らを船の帆柱に縛らせ、自らの命の安全を担保しておきながら、サイレーンの美しい歌声に聞きほれるようなものではないか<sup>4)</sup>。ここでは、サイレーンの具体的肉声としての歌声が、単に鑑賞(消費)の対象としての「芸術品」となっている。「理解」することの源泉はこのギリシャ神話のオデュッセウスにまでさかのぼる。つまり、「理解」の原点は、自らの身の安全が確保される(自己保存の原則<sup>5)</sup>が徹底される)ということにある。

- 
- 3) Claude Lanzmann: "Hier ist kein Warum", Publié avec l'autorisation de Claude Lanzmann, (「ここには、なぜがない(高橋訳)」: Shoah 日本ヘラルド映画社 1997)
  - 4) M.Horkheimer/ T.W. Adorno: 「啓蒙の弁証法」, 徳永訳, 岩波書店, 1998, ホーマーの「セイレーンの物語」の記述参照
  - 5) 同上

## 記憶の持つ倫理性

ユダヤ人大虐殺を生きのびた人、原爆の惨事の生存者、セクハラ被害者、彼らに共通している「記憶（覚えていたくともそのときにはその余裕すらない）」、「忘却（忘れたくとも忘れられない）」の事柄と、われわれは、どう向き合っていけばいいのか。

ヴァインリッヒはその著『忘却の文学史』の中で、「虜囚レーヴィは、このような生き残りのための戦いのさなかにあって、記憶との付き合いにも儉約を旨とせざるをえない。夜中、少しでもよりよい世界を夢見るだけでも、すでに十分に不経済なことなのだ。いずれにせよ、日中は全注意力を生き残りの問題に振り向けねばならなかったから。そしてそのことは、必然的に、虐待行為の何一つとして忘れられてはならず、世界から忘れられることも許さない、という倫理観を育むのだった。このような状況下では、記憶することはとてつもない多くの苦痛を伴うものであったが、生き残っている者たちがわが身に引き受けた唯一の責務であったのだ<sup>6)</sup>と、われわれが、いま、ここで、おこがましくも「理解」の対象としている者たちの置かれている状況を語っている。

被爆体験を語る多くの人の話の中に、その現場では記憶する力さえ儉約して、目の前の光景を見る力さへ節約して、ただ生きのびることのみに注意力を集中してきた様子を伺わせる表現が多く見られる。その人たちが、しかし、ぎりぎりの記憶から、言葉を超えるその体験を、大いに苦痛を伴って語り続ける。

セクハラ被害者が、記憶することが自らの生きる力を奪いかねないその体験を、忘れることが唯一のやすらぎになることがわかっているにもかかわらず、理解不能の、言葉に置き換えることそのことが吐き気を催すその体験を、大いなる苦痛を伴って口から出す。

---

6) Harald Weinrich: "Lethe", 「忘却の文学史」 中尾訳 白水社 1999 355P

## 死者の声を受容できるか？

彼らを前にして、われわれは一体いかなる関係を持てばいいのか。

この関係性を示唆してくれているように思われるのに、1940年、ナチス・ドイツからの亡命の途中、スペイン国境で捕らえられ服毒自殺したユダヤ人哲学者ベンヤミンの歴史観がある。ベンヤミンの歴史観を今村氏は次のように述べる。

「ベンヤミンにおいては自然と歴史は根源的に切断しており、人間の歴史であるかぎりでの歴史は自然の歴史の腐食でしかない。人間の歴史は廃墟になる。廃墟としての歴史は、もっとも人間的な歴史でありながら、もっとも自然史的に現れる。この切れ目こそ『根源の歴史』である」。

ここから、ベンヤミンの「物への問い」を、今村氏は、「『根源の歴史』とは、物との根源的なつき合い方であり知り合い方であろう。どのように物とつき合い、知り合うのか。根源的な知り合い方は根源の歴史そのものである」と説明する。さらに、「すべての人間的制作物が歴史的な生を終えるとき、瓦礫と廃物になる。事物は廃物になった瞬間に、ある特異な相貌を示す。それが『ヒポクラテスの顔』すなわち死相である。事物は死の表情を持つことで、それに対面する人間に何事かを伝える。廃物としての事物の表情を感受する人間の情緒の様態は、憂鬱であり倦怠である……このベンヤミンの憂鬱、倦怠は過去の死者たちを迎え入れる行為へと開かれている。未来に向かって自己の希望を開陳するのではなく、死者たちの挫折した希望、つまり正義への要求に反応する、応答すること、これが生者にとっての未来意識になる。すべては過去の死者の声を受容できるか否かにかかっている」<sup>7)</sup>とまとめる。

第二次湾岸戦争時、アメリカがイラクに落とした劣化ウラン弾の放射能の影響をもろに受けて生まれてきた子ども、その子たちの大半は生後まも

7) 今村 仁司：「ベンヤミンの〈問い〉「目覚め」の歴史哲学」, 講談社選書メチエ, 1995, 17~28P 参照

なくして死んでいく。パラス癌センターで働く小児科医フッサム氏は、その子ども（赤ん坊）の写真を撮り続けた<sup>8)</sup>。いわゆる五体満足で生まれてきた子はほとんどいない。中には生まれてきたとき既に死んでいる子もいる。その子どもたちの写真を真正面から撮り続けた。すべての子に名前があり、年齢があり、病気発症年が記されている。そして決まって顔の横の空白部分に「死亡」と書かれている。その写真を見たわれわれは、劣化ウラン弾の恐ろしさを知ることと同時に、歴史の中で、生後まもなくして、体中に障害を持って、死んでいく子どもの声を聞かざるをえない。たとえ3日で死んでいく赤ん坊の声さへ聞こえる。いや死んで生まれてきた子の声さえ聞こえる。彼らは確実にこの世に生を受け、生きた。写真に写った顔はすべて、大きな目を開いて笑っている。われわれも自然にその声に応答する。「こんにちは、調子はどう？」

### 密 猟 の 信 念

ここからのわれわれの仕事は、ベンヤミン流に言えば、「骨董屋・くず屋」になって、歴史の中で、「瓦礫・廃物」のごとく扱われ、ある時は、ガス室に放り込まれ、ある時は、原爆や劣化ウラン弾のターゲットになり、又ある時は、男の性的衝動のはげ口とされた、いわゆる進歩史観（ブルジョア派であれ、革命派であれ）から見れば「ガラクタ、くず」同然の者、物の収集をはじめることになる。

ここでは、ランズマンの映画『ショアー』、原一男の映画『ゆきゆきて神軍』<sup>9)</sup>、原爆の目撃証人の「語り」、そして、昨年被爆60年の節目の年に広島で開催された「国際平和未来会議」に招待された広島市、ドイツのハノーバー市の姉妹都市の若者に対する意識調査<sup>10)</sup>を見ていく。

8) イラク小児科医フッサムさんの話を聞く会編集・発行：「イラク小児科医 Dr. Hussam M. Salih さんの、活動記録 in ヒロシマ」参照、並びに、同会にお願いして学生対象に講演をお願いした際のスライド写真より

9) ゆきゆきて神軍：映画、疾走プロダクション、1987、監督 原一男

10) 2005年、広島市、広島国際青少年協会主催の「国際平和未来会議」に参加した、

個々の対象に向かう前に、強制収容所で家族のすべてを失い、ただ一人生還したドイツの詩人パウル・ツェランの次の詩<sup>11)</sup>に触れておきたい。

そして力そして痛苦  
そして私を突きとばし  
そして狩り立てひっ掴まえたもの、

ヨベルの、餅する、  
年、

樅のざわめき、かつて、

密猟の信念  
これはそれがそうであるよりは  
別様に言いうるもの。

これが詩のすべてである。ヨベルとは大赦の意味。ユダヤ教におけるあらゆる罪を許す年。50年が節目の年。その年にツェランはセーヌに身を投げて死んだ。ヨーロッパの歴史を見ても、いや日本においても、戦いの後始末は、「大赦」になる。法における刑罰も、戦いの後の和平条約なるものもその類。でなければ永遠に戦いが、殺し合いが続くことになる人は恐れる。ユダヤ社会では、その年には大騒ぎをして、すべてを「忘れる」。ヨベルの年の騒ぎの声のこだま。その騒ぎと対照的に、かつての収容所の周りの樅の木のざわめき。静寂。「かつて」で始まる聖書の世界。「かつて」で思い出すナチの収容所。ツェランのこの詩には、「かつて」が目立つ。「突きとばし、狩り立て、ひっ掴まえる」ナチの暴力。その暴力への、いや忘却への対抗手段は、「密猟の信念」。オデュッセウスの場合のように、自らの身の安全が保障された「娯楽としての猟」ではない。「ユダヤ人大逆殺」

ㄨ 広島市、ハノーバー市の姉妹都市の若者、並びに日本人参加者に対するアンケート

11) Paul Celan (1920~1970): 「そして力そして痛苦」, 詩集『雪の領域』1970~1971 の中の一つの詩, 中尾訳, 『忘却の文学史』, 334P 参照

の森での「真相を探る」猟は、そう簡単なものではない。味方をも裏切つて、「ヨベルの餅」に背を向けて、その舞台の危険に自らの命も登場させる「猟」。そして、われわれに残されるのは、「別様に」言い続けること。

### 『シ ョ ア ー』

ユダヤ人でない我々、原爆の被害を受けていない我々、劣化ウラン弾を被弾していない我々、セクハラ被害に遭っていない我々が、その当事者を前にして言うべき言葉を持たないままでいいのか。彼らが「言わない」から、我々は「言えない」でいいのか。彼らが「言えない」から、我々は「言わない」でいいのか。この「問い」に真正面から答えているのがランズマンの『ショアー』であり、原一男の『ゆきゆきて神軍』である。

この両作品に共通しているのは、全くといっていい程、その当時（第二次大戦時）の記録写真も、記録フィルムも、事件を解説するナレーションも、又そのときの出来事をフィクションで見せることもしていないところである。（両作品において、フィクションと呼ばれる部分がないことはない。『ショアー』における機関車運転の場面。元機関手が、かつてユダヤ人をガス室まで移送したように、今一度機関車を走らせる。インタビューに応じているときのぎこちない姿とは違って、その様になっていることには驚かされる。『ゆきゆきて神軍』における、自分の妻をして別人にらしめるつまらない芝居、全くどうでもいい役。戦時における女性の存在感のなさそのものが見て取れる）

『ショアー』においては、当然絶滅収容所からの生還者、収容所で働いていた人、その収容所の近辺で暮らしていた人が、いわゆる「事件」の目撃者として登場する。場所は、ほとんど正確に「殺戮現場とその周辺」が選ばれている。殺戮現場には、当時ナチがその大量殺戮を跡形もなく消し去ったため、今や、その後の年を重ねて大きくなっていく樅の若木が静かに繁茂している。ランズマンはその樅の木を長いカットで見せてくれる。目の前にはかつての殺戮の跡は何もない。樅の木と、草と石ころだけである。

まさに、ベンヤミンの言う、「人間の歴史と自然の歴史の切れ目、根源の歴史」が眼前に提示される。殺され、一旦、死体が地中に埋められ、その発覚への恐れのため、再びその死体が掘り返され、改めて焼かれ、焼かれた後の灰は近くの川に捨てられ、文字通り跡形もなく抹殺されたユダヤ人を他にいかなる方法で示しえたらう。

かつてユダヤ人を列車で移送し、降ろした駅のプラットホーム（ランプ）は、わずかに昔のプラットホームの跡を残している。ランズマンは、ユダヤ人を収容所まで列車で移送した当時の機関手にインタビューをしている。

ランズマン： エヴァ（通訳）、ガフコフスキ（トレプリンカ収容所へユダヤ人を移送していたポーランド人機関手）さんに訊いてよ。なぜ、そんなに悲しそうな顔しているんです？

ガフコフスキ： 連中が、死へと歩んでいく姿を、見たからです。

ランズマン： で、今いるこの辺りは、正確には、どの場所です？

ガフコフスキ： 遠くはないね。ここから二キロか、ほとんど二キロ半のところに……、

ランズマン： えっ、何が？収容所がですか？

ガフコフスキ： そう。

ランズマン： で、今、指差した、舗装していない道は何なのですか？

ガフコフスキ： あそこですよ、あそこにね、線路がね、収容所行きの鉄道線路があったんだ！

ランズマン： あなたは、トレプリンカ駅から、収容所の中まで、列車を運転したことがありましたか？

ガフコフスキ： ええ、ありますよ。

ランズマン： たびたびですか。

ガフコフスキ： 週に二、三度かな。

ランズマン： どのくらいの期間でした？

ガフコフスキ： ほぼ、一年半でしたかね。

ランズマン： ということは、収容所のあった期間、ずっと、ということになりますね？

ガフコフスキ： そうです。<sup>12)</sup>

12) Claude Lanzmann: "Shoah" (シユアー)、高橋 武智訳、作品社 1995 97～98P

ランズマンは、相手が悲しそうな顔をする理由を尋ねる。相手が、答える。ランズマンは、しかし、それ以上そのことを尋ねることがない。その機関手もそんな悲しみを忘れて、恐ろしいほど正確に、躊躇なく過去の記憶を語る。きっとこの機関手は当時も同じように少しの間の気持ちの揺らぎを感じつつも、収容所が存在した間、毎日ユダヤ人を移送していた。収容所近くで働いていたポーランド人の農民たちは、時に顔に笑みさえ浮かべて、冗談を言うように当時の光景を語る。人が群がってきてみんなで、きっと当時もそうしたように、噂話でもするように語り合う。

ヘウムノの収容所で40万人のユダヤ人が殺され、そこからのたった二人の生還者の一人モルデハイ・ポトフレブニクが、「話すことはよくない、今はそうせざるをえないから話している、現場にいたときは、死者のようにあの出来事を生きてきました」と語る時、ランズマンは、「話しながら、いつも微笑んでいますね。それはなぜですか？」と尋ねると、「どうしろ、とおっしゃるんです？泣けとでも？微笑むときもあれば、泣くことだってありますよ。でも、生きている以上、微笑む方が、ましというものでは……」と答える<sup>13)</sup>。

ランズマンは何一つコメントを挟まない。でも、上の対照的場面を見せられた我々は、そのギャップに呆れる。モルデハイ・ポトフレブニクの「微笑み」に涙した我々は、元機関手のあまりの正確な記憶や、ポーランド人の農民の笑いながらの当時の出来事に関する「噂話」を聞いてしっぺ返しを受ける。

ランズマンは、スピルバーグの『シンドラーのリスト』<sup>14)</sup>に嫌悪感を示しながら、「『シンドラーのリスト』を見て人々が泣いている？なるほど。しかし涙は一つの楽しみ方であり、カタルシスである。大勢の人たちが私にこう言った。自分はあなたの映画を見ることができない。きっと『ショアー』を見ても涙を流せないからだろう」<sup>15)</sup>と言う。

13) 同上 39P

14) スティーヴン・スピルバーグ：「シンドラーのリスト」、アメリカ映画、1993

『ゆきゆきて神軍』

同じように、第二次大戦の真相を探ることをテーマにした映画でありながら、その映画を見た観衆の多くが、涙を流すどころか、主人公に怒りを覚えさせする映画が原一男の『ゆきゆきて神軍』である。この映画も『ショーアー』と同じく、ドキュメント映画である。主要な場面には戦争体験者(いや、その戦争を生きのびた人々といった方がいいかもしれない)しか出てこない。当時の生々しい記録映像もなければ、第三者の解説もナレーションもない。主人公奥崎謙三が当時の上官を訪ね、戦争犯罪を問いただす場面が続く。問いただす場面は、『ショーアー』の場合のように実際の殺戮現場ではなく、その元上官の家であり、そのわきでは決まってその上官の妻が心配そうに聞き入っている。元上官たちのほとんどは自らの名前を変えて、過去から逃げて、過去を忘れるように生きている。過去を忘れるように生きているのは何も当時の上官たちだけではない。自分の子を戦争でなくした母親を訪ねた奥崎は、目に涙を浮かべて、「自分が、あなたのお子さんを埋葬した」と告げる。そして、彼女に彼女の息子の戦死した現場に行くことをすすめる。その光景は、まさに、一人の「おひとよし(息子の骨の代わりに石ころが入っている骨壺を息子の骨が入っていると信じこまされている)」のおばあちゃんをその忘却の現代から戦時中に引きずり戻さんばかりの光景である。おそらく、この映画がなければ、ベンヤミンの「骨董屋、くず屋」の対象になっても、社会からはほとんど注目されることなく、「瓦礫・廃物」のごとく扱われてしまっていたこのおばあちゃんに奥崎はパスポートを作ってやってまでかつての戦地に連れて行こうとする(結局、彼女は撮影が終わらない内に死んでいくのだが)。一方では、元上官の一人は記憶を閉ざし地方の名士としてぬくぬくと生きている。奥

15) Claude Lanzmann: "Holocaust", représentation impossible 「ホロコースト—不可能な表象」(高橋訳)— *le Monde* 1994.3.3. (Shoah 日本ヘラルド映画社 1997)

崎はこの上官たちの忘却の壁に体当たりをする。暴力も辞さない。この映画を学生に見せると、ほとんどの学生は、「奥崎の暴力は許せない。過去を反省し、忘れて静かに生きている人に、無理やり過去の出来事を話させることには抵抗がある」と感想を書く。『ゆきゆきて神軍』が単なるドキュメントフィルムであれば、聞き手は相手にここまで告白させることはできない。あくまで聞き手は第三者に留まらざるをえない。また単なるフィクション映画にすると過去がはるか遠くに逃げていってしまうことは避けられない。

「日本兵が日本兵の人肉を食する」という行為をいったい人はどんな言葉を使って、どんなスタイルで口に出すのか。誰もがそんな発言をする準備をしてきたはずがない。その瞬間の身の毛もよだつ雰囲気そのまま伝えているのがこの映画である。その事実へ眼差しを向けるためにはたくさんの障害物がある。奥崎の暴言・暴力、元上官の一人の病气（病人に何をするのか!）、暴力を聞きつけた警官（法まで犯して!）、あたりの騒音、こういったものが、映画を見るものの注意力を散漫にさせる。でも最後に、奥崎によって病院に救急車で運ばれるまでの暴力を受けた、西ニューギニア独立工兵第36連帯350名の兵士の中で奥崎とともに2人だけ生きのびたその中の一人の上官は、「おれはみんなに食べられなかった。だって、おれは鼻が利いたから。ジャングルのどこにいてもどこに水があるかかぎ分けることができた。おれを殺せばみんなの命が危なかった。だからおれは食われずにすんだ」と告白する。ここでの告白の中味は、人間の話す中味ではない。動物や植物が、水がないときにいかに生きのびるか、そのときの習性、本能の動きの描写である。ここにも、ベンヤミンの言う、「人間の歴史と自然の歴史の切れ目、根源の歴史」がある。おそらく彼もジャングルの中で生きのびることだけに全精力を集中させていた。「余計」なことを考える力を儉約せざるをえない状況にいた。先のことを夢見ることさえ余計なことだったに違いない。しかし考えてみれば、彼ら元上官たちも戦争の道具となって命をかけて戦地に赴き、かろうじて生きて帰ってきたもの

の、自らの名前までも変えて、過去の記憶に蓋をしてひっそりと生きていかざるをえない。彼らも「骨董品」の一つにしか過ぎない。

## 密 猟 の 罨

この二つの映画において、先のパウル・ツェランの「密猟」を地で行くのが、『ショアー』では、トレ布林カ収容所で働いていたドイツ人の元 SS 伍長へのインタビューの場面である。SS 伍長には顔は出さない約束で（この約束の言葉もきっちりカメラに取められている）、しかし、隠しカメラでその伍長の顔を我々にしっかり見せてくれている。まさに、「密猟」の罨そのもの、そして、その罨にかかった「獲物」が我々に提示されている。

『ゆきゆきて神軍』においては、いってみれば、奥崎は自ら檻の中に入って（戦争体験者同士のコンテクストの中に入って）相手に暴力を振るうため、檻の外の警官は（映画のコンテクストの外にいる警官、つまり本物の警官は）一切手が出せない。一つのエピソードとして、奥崎が撮影の最中、相手と取っ組み合いになりやられた場面がある。カメラはそれをじっと撮っていた。そのシーンの撮影後、奥崎は原監督のところに来て、「この映画の主演がやられているときに、お前はなぜおれを助けようとしな」と、怒鳴ったという。そんなことが原にできるわけがない。スクリーンの中と外の境界の綱渡り。

これらの映画を見る我々は、さながら、インターネット上で、法的には見ることが許されないページを良心のやましさを持って見てしまっているようなものである。隠しカメラにしろ、暴力にしろ、当時の無法化された時代の記憶の世界に侵入していくのに他にどんな方法があるというのか。結果として、この二つの映画を見た我々は、思うように、感激できない、「涙を流せない」。そう、いつしか、我々もその「密猟」に参加させられているのだ。ただし、その猟の罨の仕掛け人か、罨の獲物なのか、はっきりしないが。

## 根源の歴史への一つの挑戦—ある被爆者の沈黙

一人の被爆者が75を過ぎて、当時の体験を語りだす。「語りたくない」と語りだす。被爆して60年間、ひっそりと身を隠すように生きてきた被爆者。

「顔にケロイドがあるため、町を歩いても裏通り、右の顔を見せない苦勞の毎日。少し金のできたので、顔の整形に病院へ入院。幾度か皮膚移植するが治らない。もう自分の人生絶望。ケロイド一生つきまわる。国のための犠牲者とはいえ、本当に残念。病院入院代自費」

自分の孫娘が嫁いでいくのを見届けて、やっと重い口を開き出した。「被爆したわたしは、広島から列車で最寄の駅まで、そこから40キロも担架で実家まで運んでもらいました。戦後60年、広島に行ったことがありません。行く勇氣も、行きたいという気持ちもおこりませんでした。せいぜいバスセンターまで行きますが、そこからバスを乗り換えてさっさと目的地に向かいました」「当時まだ高等科卒業二週間前。建物を疎開させる仕事をしていました。好きなおんな子もいました。被爆して、必死で比治山の方向に歩いていきました。体中やけどで痛かった。水に入るとその痛みが和らいだ。何度か川に入ったのを覚えている。その後、何日間か気を失っていたみたいで。次に気がつくと、もう体全体水膨れ、黒紫色に変色。体中に何百匹の蛆が沸いて、グチャグチャ。頭の先には『線香』と『ご飯』が上げてありました。一度海田県女の生徒二人がわたしを見舞いにやってきてくれました。わたしを一目見て、それ以後二度とわたしの目の前に現れませんでした」「自分には関係者が多くおりますので、書けないこと、話せないことも多くあるのもわかってもらいたいと思います。自分が誰かということだけは探さないでください」

彼の口を重くするものは推測される。彼の原爆後遺症は今も続いている。

ある別の被爆者の証言に次のようなものがある。「爆心部より逃れて、折り重なって身を横たえている市民の方の救いの呼びかけや、まなごしに応

える心を失い、これらの方を踏みこえて逃げた」<sup>16)</sup>「あのときの話に触れると、胸が締め付けられて息苦しくなる。無理に話そうとすると精神状態が変になりそうでとても話せない。弟の死に様が目に焼きついている。あの時、呼んでも答えがなかったので逃げたが、ただ気を失っていただけではなかったか。そのことを思うと、五臓六腑がヒラヒラと動く」<sup>17)</sup>

彼らが、原爆投下直後体験したものはなんだったのか。自分の好きな女の子に見捨てられた被爆者、やけどに苦しむ友人の顔を一目しか見られず、いや、一目見て、逃げるようにその場を去っていた女の子の苦しい記憶。見捨てた者、見捨てられた者。彼らの心には具体的な個々の顔が「目に焼きついている」。

ここにも、まさしく、ベンヤミンの言う、「人間の歴史と自然の歴史の切れ目、根源の歴史」がある。

我々には、これを「別様に話す」課題が突きつけられる。

### まとめ—「瓦礫、廃物」の中の一人、一つに出会う

ランズマン、原一男があれほどまでに嫌った「なぜ」に始まる「理解」を避けて、さて、いかなる形で、「別様に」話せるのか。

ヒントはある。

インターンシップで、ある老人ホームに行った一人の女子学生が、その体験報告会<sup>18)</sup>で、「わたしは、ある老人ホームを訪問して、何もかも見たこともないことばかりで、何をどうしていいのか全くわかりませんでした。あるとき、一人のアルツハイマーのおじいちゃんと散歩をしているとき、おじいちゃんは疲れたのか、散歩道の脇にあるベンチに腰掛けました。そしてわたしに、『おじょうちゃん、わたしを座らせてくれんかねえ』と頼むのです。おじいちゃんは既に座っているのです。ただただびっくり。ど

---

16) 茨城 男・62:「被爆者からの伝言」, あげび書房, 2006, 25P

17) 同上

18) 広島修道大学2005年度インターンシップ参加学生

うしていいか、腰を抜かささんばかりに驚きました。そこへ、そのホームのヘルパーさんが来て、何もなかったかのごとく、そのおじいちゃんの相手をしていますのです」と、自分の力なさを嘆き、そのヘルパーの何事もなかったかのように、「それじゃ、おじいちゃん、座りましょうね」と、仕事を続けるのに感心すると同時に、「えっ!」、と矛盾を「感じ」た、と吐露している。

この報告を聞いたとき、ぼくの心の中の何かが異様に動いたのを覚えている。その動きを言葉にできないで戸惑っていると、一人の年配の男性が、「いい話を聞かせてもらいました。がんばってください」と声をかけている。彼女の発表の中味は、「わからない、驚いた、矛盾を感じた、腰を抜かささんばかりにびっくりした」だけである。「いい話とは程遠い」話しか彼女はしていない。そんな彼女に、その男性もぼくと同じものを感じたに違いない。「ホームに入ればこんなヘルパーに会いたい」という思いである。彼女の何がそんな思いにさせるのか。彼女がホームの仕事を「理解」しているには程遠い。むしろ「理解できない」と嘆いている。ベテランのヘルパーがそのおじいちゃんに「アルツハイマーの患者」として、いわばルーティンの仕事として接しているのと違って、その学生は、「他の誰とも取り替えようがない」そのおじいちゃん個人と向き合っているのだ。ベンヤミンの「根源の歴史」と出会っているのだ。

『ショアー』、『ゆきゆきて神軍』において、ランズマン、原一男は、登場する個人を大事にする。登場する全ての人の名前を公にしている。名前もなく、ただ虜囚番号のみで抹殺されていったユダヤ人、戦う技術（敵を殺す術）を備えた兵士の一人としてしか数えられず、戦いに敗れば、みんなの「餌」にされていった兵士。彼らにたどり着くには、目の前の一人ひとりにしがみついていくより他にない。

「瓦礫、廃物」のごとく、「束にして、塊」で扱われかねない人々の一人ひとりから目を離さない。劣化ウラン弾の被害者として、障害を持って生まれてきた子を、「塊」としてみるのではなく、その壁を越えて、壁の向

こうの子どもたち一人ひとりに出会うこと、セクハラ被害者というレッテルを剥がしてその中の一人の人間に出会うこと、それがあってはじめて我々は彼らと会話を始めることができる。先の学生は、戸惑いながらも、矛盾を感じながらも、驚きながらも、一人のおじいちゃんに辿り着いた。「他人事理解」から「自分事」の出発点に辿り着いたのだ。

「他人事理解」の前提には、「自分は変わらない、自分は安全だ」という保障がある。「自分事」となると話は別である。驚き、慌て、不信感を抱き、矛盾を感じ、苛立ち、「わからない」自分と出会う。

三竦みという言葉がある。中国の故事「関尹子」に因れば、ナメクジは蛇を、蛇は蛙を、蛙はナメクジを食うところから、三者互いに牽制しあって自由が利かないことを意味するとある(「広辞苑」)。「理解」するとは、この故事の中の二者の関係にしか目が向いていないことになる。その中でも、「自分が食う」方へのみ目を向けている。自分が「食われる」こともあることまで目が届いていない。

抹殺され「灰」となって川に流された600万人のユダヤ人、命令によって、「自分の体を食され」ていった兵士たち、男の性的欲望の餌食とされたセクハラ被害者、劣化ウラン弾の放射能に犯され、あつという間に亡くなっていった子どもたち、彼らに辿り着く道は見えてきたように思われる。しかし、この道を進むことは、無傷では済みそうにないが。

### まとめの付録

最後に、「世界の、今の」若者の広島体験(「2005年の「国際平和未来会議」参加者に対するアンケートの自由記述の一部」)を披露して、まとめの付録としたい。ただし、彼らの言葉に対しては一切のコメントを、ここでは控えることにする。

①「自衛のための戦争、正義のための戦争もあるのだから、戦争すべてを否定するのはおかしい」という意見についてあなたはどのように思いますか?<sup>19)</sup>

「難しい。例えば、平和主義の自国が軍国主義の他国の侵攻を受けたという

ケースを考えれば、戦うのが正しいのか（平和主義国家の存在を守るのか）、戦わずして死を覚悟して望むのが正しいのか（自らの理念と共にこの世から去る覚悟で臨むのか）、どちらが正しいのか私には今のところ明確な答えはない。考えていくべきこれからの課題の一つだと思う」（日本）

「平和のために争うことは正しいはずがない。でも、自分が殺されないためには、自分の身は自分で守らなければならない。将来、平和な世界になることを望むが、そのためには、私たちはかなり苦しまなければならないだろう。このようなことを書くのはとても残念だが、自分が戦争を体験しない限り平和の重要性を本当に理解することはできないのだろうか？」（ドイツ）

② 今回の青少年交流について何を期待していたか？

「世界のいろいろな場所からやってきたいろいろな人々の平和に対する考え方が、どの点で似ているのか、またどの点で異なっているのかを知り、我々がどのように連帯していくかを考えること」（日本）

「まずは再会。そしてヒロシマからの平和の発信。日本文化、他・多文化との交流」（日本）

「友人に会うこと。文化の違いを認めそれを取り込むこと。みんなに共通する点を明らかにすること。平和についてのアイディアと意見を交換すること」（イギリス）

「最初は、参加者と仲良くなり、偏見なしで話し合う訓練をしたと思っていた。次に、異文化を学び、普段の生活などのことを話し合いたいと思った。最後には、みんながここにいる理由、平和に対する意見を交換し合いたいと思うようになった」（ドイツ）

「ここに来るまで、悲惨な原爆体験を学び、自分との違いを仲間と考え、第二のヒロシマを繰り返さないよう共に働きかけたいと期待していた。その答えは、違いなどを乗り越えれば、難しいけれども不可能ではないと思う」（ヴェローナ）

③ 一連のイベント（国際平和未来会議、江田島青年の家での共同生活、平和祈念式典、慰霊碑参拝、原爆資料館訪問、ホームステイ、その他）で一番印象に残っているのは？

- 19) この意見に対する回答は、日本からの参加者28名のうち、「まったく賛成だ」が1名、「どちらかといえば賛成だ」3名、「どちらかといえば反対だ」9名、「まったく反対だ」15名となり、海外からの参加者42名は、「まったく賛成だ」0名、「どちらかといえば賛成だ」21名、「どちらかといえば反対だ」7名、「まったく反対だ」14名となっており、日本—海外の傾向の違いが見られる。

「未来会議への参加。分科会もそうだったけど、長年平和教育を受けてきて初めて異国の意見を聞いた気がするから」(日本)

「一番というものを決めることはできない。全体として得られたものの方が大きいと思う。会議を通して印象に残ったものは、笑いあい、分かり合えたこと」(日本)

「原爆資料館訪問。前日には宮島でみんなはしゃいでいたが、資料館にはいると真剣で、じっくり見学していたのを嬉しく感じた。あまり十分な時間がなかったため、『もっと見たい』という声や、『まだ見てないのに』という声が多数あって申し訳なかったし、かわいそうだった」(日本)

「江田島で、お互いに出会い、友達になることができた。他国に対する偏見は時間がたつにつれて消え、お互いに学びあい、意見を交換することができた」(海外参加者)

「原爆犠牲者が苦しんだ残虐行為を自分自身の目で見ることができた。実際に原爆資料館を訪れるまでは、本当に心を打つことはなかったが、今は多くのものを目にし、二度と戦争に苦しむ人や町が出ないことを願います」(海外参加者)

④この交流で体験したことのうち、何を誰に最初に伝えたいか？

「父に、分科会を通じて、思った以上に他国の人々とは平和に対する考え方に大きな違いがあるのかもしれないということを伝えたい」(日本)

「世界中の同世代の子どもたちが、広島・長崎について真剣に考え、何かアクションを起こそうとしている現実を被爆者である祖母に伝えたい」(日本)

「友達と家族に、みんなで過ごしてよかったと感じたことを伝えようと思う。平和をつくる力を私たちは感じた。この感情と力を家まで持って帰りたいと思う」(ハノーバー)

「まずは私の彼女、そして両親に、この期間中に私たちが何を話したかを話したい。私はこれからすることは、友達全員に原爆がどれほど悪影響を及ぼすかを伝えることだ。そしてそのようなことをみんなに伝え続けようと思う」(ゼールツェ)

「最も思い出深い被爆者の話をまずは伝えようと思う」(フランス)

「みんなに日本はどうであったか、日本人はとても礼儀正しく友好的だったと伝えたい。また、原爆がどのように広島を破壊したかについても伝えたい。被爆者の話も伝えるつもりだ」(プレнтаイヤ)

「原爆について伝えたい。私たちは学校で原爆について勉強したが、私たちに及ぼす影響が何なのかは知らなかった。何が起こったのかを知って、本当に衝撃的だった」(テグ)

森島：ナメクジと蛇と蛙

「この会議は会議ではなかったので少しがっかりしている。一つの議題に対してたった一度しか私たちは話し合っていない。これは会議とは言い難い。また特に最後の金曜日に、日本人と何かをする時間がほとんどなかったのは本当に残念だった。私たちは興味深いことも学んだ。この2週間で行動を起こすべきだった。ただ全体としてはここにきて本当によかったと思う。ありがとうございました」（ゼールツェ）

（この論文は、2005年から2006年にかけての、広島修道大学総合研究所調査研究「男の論理の向こうの平和を求めて」の成果報告の一部である）

## Summary

### Ein langer und langsamer Weg zum Frieden

Yoshimi Morishima

Wie kann man eigentlich zu den Atombombenopfern oder den ausgefüllten Juden kommen? Gibt es einen sicheren Weg, der uns direkt dort führt? Der Regisseur von "Shoah", Lanzmann sagt, "man soll durch 'kein warum' kommen." Für ihn ist "warum" nichts anderes als Hindernisse, um zu ihnen zu kommen.

Für die Überlebenden der Atombombe oder des Vernichtungslagers war es unmöglich gewesen, damals anderes zu denken als zu überleben. Was dort passierte, war gar nichts zu verstehen. Trotzdem versuchen sie was zu äußern, was sie dort erlebt haben. Was sie aber erzählen, ist ja "Urgeschichte" nach dem Begriff von W. Benjamin. Was sie erzählen, ist ein Geschehnis eines Augenblicks, wo sich gerade die Geschichte der Menschen von der Geschichte der Natur trennt. Anderes gesagt, wo gerade die gegeneinander getrennten Geschichten von Menschen und Natur sich wieder treffen. Typisches Beispiel ist es, was der überlebende Soldat beim Film "die marschierende Gottestruppe unter der Regie von Kazuo Hara" gezwungenermaßen gesteht. "Ich bin von den anderen Soldaten nicht gefressen worden, weil ich gute Nase gehabt habe, mit der ich immer den Ort gefunden habe, wo es Wasser gab." Oder eine Äußerung eines überlebenden Atombombenopfers; "nach der Explosion der Atombombe lagen überall viele, die schrien, 'Hilfe uns!', aber was ich machen konnte, war nur davonzulaufen, um zu überleben."

Bei “Shoah” treten die Überlebenden auf, erzählen, was sie gesehen haben. Aber keiner sagt, wie sie durchgekommen sind, um zu überleben.

Was wir machen können, ist nicht, sie zu verstehen, sondern anders zu sprechen als sie selber sprechen. Man sagt, dass “warum” den Menschen vom Tier trennt. Aber dieses “warum” hat die Menschen durch die Atombombe ermordet und 6 Millionen Juden vernichtet.

Anderes zu sprechen ohne warum bringt uns Unsicherheit, und manchmal verletzt uns. Wir können nicht einfach das Ziel erreichen. Durch den Abwurf der Atombombe sind 120,000 in ein paar Sekunden gestorben. 6 Millionen Juden sind alle ohne einzelnen Namen, nur mit Nummern gestorben. Wir müssen langsam sprechen und jedem Gesicht gegenüber stehen bleiben. Es gibt viele, die darauf warten, dass wir dort kommen und ihre Stimme hören.